

学生との関わりや教育実習で気をつけるべきこと

わからないことは自分から指導教諭などに聞きに行くことは非常に重要であると感じた。先生方は自分の業務がある中で受け入れてくれているため、受け身ではダメである。実習期間中に体育祭があった。このような学校行事は、生徒の教科以外の学校生活における様子を捉えるチャンスである。目立たない生徒にこそフォーカスし、行事で日の目を見ない子供にどう接するかが重要である。また、先生の目線で生徒への心配りをするのが重要であり、SHR の連絡事項は漏らさずに伝えることや、学級日誌を見る時に先生の立場として向かわなければならない。

教えるにあたっては、受験科目はしっかりと準備をして内容を定着することに主眼を置き、必須の科目では生徒のやる気を引き出す授業が求められる。ただし、授業一辺倒になった時に5分ほどのブレイクスルーを入れると生徒の興味を惹く事ができ、効果的である。授業は、PDCA サイクルを回す絶好の機会であり、初めの授業と6回目の授業では当然改善された授業ができる。しかし、先生にとっては何回もある授業の一コマであっても生徒から見ると最初で最後の授業であるため、初回の授業だからと気を抜かず本気で準備することが大事である。

重要な課題は、色々な生徒との距離感をどうするかであった。初めの授業は生徒も緊張しているが、2回目から素を出してくる。そのような中で、自分がどのような空気感で授業を行うのか。生徒への声かけをどうするか。寝ている生徒などを起こすなど、どの様に声かけをするか。等の対応を迫られる場面が多くあった。これらの問題に対して、実習期間中に明確な答えを出すことはできなかった。授業においては、「生徒に振り回されない毅然とした態度で臨むことが重要である。」との指導を受けた。しかし、普段の学校生活などにおいて距離感が近い生徒にどのように接し程よい距離感を取るのか、という宿題をいただいた。

授業準備などで気をつけること

歴史総合の授業で押さえることは、背景の流れをたらえる、因果関係に沿った授業をすることである。また、生徒にとって馴染みがない語句は説明することが大事である。抽象から具体への授業が大事であり、板書計画を立てることはもちろんのこと、穴埋めプリントの説明をしているときに立ち帰れる、授業のポイントが詰まった板書をする事が大切である。プリントの年表は焦点化をはかり、何を伝えたいのかを明確にする事が大切である。各国の歴史に触れるというよりは、主役をきめその国に焦点化した形の大原則を抑える授業作りが大事である。また、説明の予行を行い例え話が生徒を惹きつけるものになっているかについて注意する必要がある。

授業を行う時の注意点は、教科書を後のロッカーに忘れた人はいないか、プリントを忘れ

た生徒がいないのかを確認し生徒が授業に取り組む事ができる環境をつくる事がまず大事である。教科書を授業の最初に開いてもらうことで、生徒が授業で暇であっても教科書を見られるようにすることで何らかの形で学びにつなげる事ができる。問いを生徒に投げる際には、教室全体に問いかけてから個人に当てるようにすることで、生徒一人ひとりが考える事ができる。また、「初めて出てくるけど…」や「前にも出てきたと思うけど…」のように発問に前置きを入れることによって、生徒の焦りを軽減しどのレベルの発問なのかを生徒が認識する事ができる。このような、さまざまな注意点が見えてきた。

また、段取りが一番大事であるとも思った。電子黒板を使用する場合は動作確認を行うことや、プリント準備はもちろんのこと教材研究は怠ってはならないと思った。教材に動画を用いた事があったが、授業で伝えたいことと動画の伝えたいことが一致しているかに注意する必要があったがその事まで気が回らなかった。スモールステップで一つひとつ押さえながら進むことが大事であり、飛躍しすぎてはいけないのだと実感した。そのため、65分を一人で準備するとなると、ネタ、プリント、板書計画など準備が大切であり、本番（授業）の全ては段取り、準備で決まると感じた。

研究授業・実習の振り返り

やりたいことが多く生徒の反応を拾いきれずに授業が終わってしまった。時間がたりなくワークが多かった。生徒の動きがバタバタしており、発表者の方向に、自分の班での活動が終わっていないため注目しきれていなかった。答えを板書してしまうと生徒は考えることをやめてしまう。そのため、聞く時、活動する時などの時間を区切る事が大切であると思った。

多くのアイデアを思いついても一つのことに焦点化を図ることで、生徒が今回の授業を終えて持ち帰れるものを用意する事ができるとアドバイスをいただいた。授業準備には、多くの時間をかけることができるが、授業は時間が限られているため、詰め込むのではなく限られた授業時間で生徒にどのように伝えたら定着、より深い思考が促されるのかを考えるべきであったと。

今回の教育実習を終えて自分がどのような特徴を持ち合わせているのかをまた一段と自覚する事ができた。自分ごとの調べ物をしているときは一つの物事に熱中して、周囲が見えなくなりながら物事を突き詰める集中傾向の特徴があった。しかし、授業を行うと知識がバラバラとなり話があちらこちらに飛んでしまう散漫傾向にあることに気づいた。つまり、授業中は大きな物語から具体へと筋の通った講義をすることをしなければ、生徒には伝わるものも伝わらないのであることに気づいた。教わること、自分が理解すること、教えるということ、相手が理解するということは、別の段階であることをしっかりと自覚して今後の授業を行いたい。

今回教育実習を受け入れてくれた母校には感謝しかありません。今回、教育実習生が11名ととても多い中、教職員の皆様や、生徒が暖かく迎え入れてくれました。今回の教育実習を受けて自分の未熟さを知り、生徒や保護者の方、教員の方に多くのことを学ばせてもらったと思いました。自分の成長を感じることができた反面、その不完全な状態で授業を行なっ

ていたということですから、生徒のことを思うと何とも言えない気持ちにもなりました。

指導教諭の先生には、実直なところがあなたの強みだと言われました。その実直さを今後生き詰まらないように生かしていきたいと思いました。